

---

# スカイガレオン（カードを使ったハイファンタジー）

やった

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スカイガレオン（カードを使ったハイファンタジー）

### 【Nコード】

N8934Z

### 【作者名】

やった

### 【あらすじ】

マイナーなカードゲームを小説にしようとして途中で断念したファンタジー

天空に散らばる空の大地が一つ 『ラガシユ砂漠島』。

からからと乾燥した熱気の中、レイン「アスタリアは左の肩口から止めどなく溢れる血を乾いた布で拭いながら、懸命に前へと足を進めた。

呼吸を最小限に抑えながら、濡れた黒の前髪をかきわけ。覗いた額から流れる汗は一向に止まらなかった。このまま数刻目を浴び続ければ、水分を失って死に絶えるだろう。

進むのを止めて穴を掘り、この場で夜まで耐えるという選択肢もあったが、レインはそれを良しとしなかった。一刻も早く、グリゴリー「レーピン宰相に『あのこと』を報告をしなければならなかったからだ。

故に夜まで待つてはいられない。このまま荒野の街道まで歩き続け、クセルルクスのキャンプ場までどうにか持ちこたえる。それがレインの任務であり、為すべきことだった。

「……最悪だな」

しかし砂漠の真ん中で、レインは歩みを止める。訓練によって得た超聴覚が、今最も聴きたくないリズムを拾っていた。

……何も無い空を見上げる。静寂が徐々に騒音に変わりゆき、やがてそれは轟音となる。

「来なよ、『スルト』！」

何者かの呼び出しに応じて、赤のカードより出ずる災厄の巨人その名も『スルト』。

鉄壁の城ほどのサイズを持った巨大な怪物が、業火を纏い、突然空間を割いて出現した。

「さて、どうしたもんかね」

やれやれ、と肩を落としながらレインは目を細める。

極めて冷静に、いつものように記憶を探ることにした。

「赤のスルト。サイズからしてSR級。広範囲を焼き尽くす遠距離型のガレオン。ムスペルヘイムの獄炎は全範囲を焼き尽くす絶対攻撃……回避は不能、か。そしてそれ以上にやっかいなのは」

「行くよ、スルト。『殲滅のレーヴァテイン』！」

「そう、それぞれ！」

砂漠にそびえ立つ炎の巨人が、その腕に携えた刃渡り六十メートルにも及ぶ巨剣を薙ぐ。異常な風圧で視界の大半が奪われ、圧力に耐えるのに精一杯で動くことも適わない。

徐々に近づく熱気が、レインにはまるで死のカウントダウンのように感じられた。

（つたく、いきなりかよ……敵マスターはどこだ？）

マスターが気を失うか、あるいは命を失えばガレオンは送還される。

既に怪我を負っている現状、スルトを真つ当に相手にするのは適切ではないと判断したレインは、マスターを討ち、スルトを送還させる戦略に切り替えた。

が、見当たらない。赤のガレオンマスターとなれば当然敵はアスラン軍のはずだが、その姿は視界には入らない。

正々堂々を是とするアスラン軍のマスターが姿を隠している、なんてことはレインにとって初めてだった。

（仕方ないな……ここで『最後のSR級』を使うのはもったいないが……）

ともかくにも、迫り来る『殲滅のレーヴァテイン』をどうにかしなくてはならない。

マスター捜しは後回しにして、レインは腰に差した刀を抜いた。

レインが育った失われた大陸、板東に伝わりし魔の刀・陽炎。その神秘、今こそ解き放つとき。

「巨人には巨人だ。さあ、力を使わせて貰うぜ……『スカジ』！」

レインは最後に戦った青のガレオンの名前を告げる。それは刀が奪ったガレオンの魔力を、引き出し放出する魔性の術式。

SR級・スカジの中列秘術 『巨人の守り』 発動。

「……！？ なに！？ そんなバカな……！？」

どこからか、敵マスターの驚嘆が漏れる。

それもそのはずである。巨人スルトの必殺・レーヴァテインの一撃が、突然現れた謎の青き巨人によって完全に止められていたのだから。

「ぐっ……やっぱSR級は、キツいか……」

僅かに血を吐きながら、さらにレインは刀を構えた。陽炎は倒したガレオンの技を一度だけ使うことが出来るが、同時に所有者の体力を奪う魔性の刀だ。

怪我を負っている現状、出来ればこれ以上この力を使いたくはない。その上、刀に宿っているR級以上の力はもう『青龍』しか残っていない。これだけではできれば温存したい。

しかし今使わねば 死ぬ。

スルトの技を防ぐと同時、スカジの術は失った。この隙に攻撃に転じなければ、次に放たれるレーヴァテインを防ぐことは困難である。

だからやるしかない。

レインは陽炎に語りかけるように、呟いた。

「R級・青龍の前列体術 『突進』」

瞬間、爆発的に砂地を蹴り上げる。奮迅舞う中、水神を纏ったレインはスルトの心臓目がけて音速で空を突き抜ける。

「水龍閃！」

ガレオンの術を上乗せした、レイン独自の『その場限りの剣技』。水流を竜巻のように散らしながら、斬撃が炎を裂き、スルトの肉を一閃して断つ。

瞬く間に空が明るむ。もはや巨人はいない。勝敗は、一瞬にして決したのだ。

「な……！！ R級の技で、SR級のスルトが一撃だつて……！！？」  
地上から悲鳴が聞こえる。

レインは舞うように降り立ちながら、ようやく敵の姿を視認した。そして同時に、思わず立ち尽くす。

「……どういうことだ？ フラッグ」

スルトのマスター、フラッグ＝ローエン。彼はレインの知り合いだった。

それどころか、彼はレインと同じ、レーピン宰相率いる『黒帝の蹄』の一人であり、今回アスラン区域であるラガシュ遠征のためにもにやつてきた仲間だ。

レインは困惑する。何故黒のマスターであるフラッグが赤のガレオン、それもSR級を扱えるのか？ また、何故フラッグが自分を攻撃するのか？

答えは、一つしかない。

「そうか……アスランのスパイだったんだな？」

しかしフラッグはクックと笑うだけだった。

自慢の金髪が乾いた風に流れる。両の碧眼がレインを捕らえ、嗤うように言った。

「いや、いつもの任務さ。キミを殺す任務なんだよ、レイン！」

「！？」

フラッグが叫ぶと同時、レインを囲むように黒装束の男が数人現れる。

「……なるほど、俺は捨てられたんだな」

こうなればバカでも気付く。

どうやら、何かの陰謀に自分はハメられたらしいと、レインは自嘲した。

おそろく。

レインがレーピンに伝えようとした『あのこと』を、レーピンは初めから知っていて。

逆にそれを知ってしまったレインが邪魔になったのだろう。

「ははっ」

自然と、自らが置かれた境遇を察した。察して、それを静かに受け入れた。

しかしだからといって。

ここで彼らの思惑通り、死んでやるつもりは毛頭ない。

「へえ、レイン、やる気なの？ ……言っておくけど、先ほどのようにはいかないよ。スカジも青龍も使い切ったんだ。もうキミの陽炎の中には、スルトが一体とUC級が数体いるのみだろう？ けれどキミはもうボロボロだ。SR級の技を出した瞬間に命が尽きるさ」さらに、とフラッグは勝ち誇るように続ける。

「仮にスルトのレーヴァテインがキミに使えたとして、それは僕らには通用しない さあ、出てきなよ、『ヨルムンガルド』たち！」フラッグと周りの男たちがそれぞれその大蛇を呼び出す。禍々しい威圧感を放ちながら、強靱なウロコに覆われた三体のヨルムンガルドが砂の中より静かに現れた。

（ヨルムンガルド……異世界より大洪水を呼び起こす大蛇、か。なるほど、スルトの炎はかき消され、おそらくこいつらには通用しない）

ふう、と静かに息を吐き、集中する。

フラッグが言うとおりに、レインにはもうスルトの技くらいしか強力な攻撃技がない。

しかしスルトの炎は効かない。かといって残りのUC級はどれもこれも大洪水を打ち破れそうになかった。

（奴らが動くより先にマスターを直接攻撃する。それしかないみたいだな）

ヨルムンガルドは遅い。大洪水を呼び起こすまでに、おそらくタイムラグが生じるだろう。レインはその一瞬の隙を突いて、フラッグたちを焼き尽くすことにした。

マスター殺しに躊躇はない。レインはそのために育てられたのだから。

「あれれ、ビビって動けない？ だつせえなあ、レイン！ 死んじやえよ！」

フラッグのその一声とともに、再び火蓋は切って落とされる。

ヨルムンガルドより大洪水が呼び出される音。その一瞬の隙にレインは、

「SR級・スルトの特技 『殲滅のレーヴァティン』！」

獄焔の刀より剣圧を続けざまに放ち、フラッグたちを狙い撃ちにする。

「はああっ……九・連・撃！！」

体力を陽炎に吸われ、意識を失いかけながらも、レインは意地で攻撃を押し通した。

一方地獄の火焰を纏った刃の嵐を目前にして、しかしフラッグはにたりと笑みを零す。

「そんな行動は読めてるんだよ……守れ、『玄武』！」

鋭い轟音が天に奔る。

現れた黒のガレオン、その名は『玄武』。巨大な亀のガレオンである玄武の堅い守りに遮られ、レーヴァティンの九連撃はフラッグたちに届かなかった。

「……ちいっ」

レインは思わず舌打ちする。万策が、尽きていた。

迫り来る大洪水を防ぐ手立ては もう、ない。

「ははははっ！ 『千手のレイン』様も、こうなっちゃあ、形無しだねえ！ キミの千手を一本ずつ千切っていくのは中々骨が折れたが……これで終わりさあっ！」

「まだ、終わってたまるか……！！」

UC級・麒麟の技にて加速。迫り来る大洪水を回避 不能。

「ぐっ！？」

回避できる勢いではない。水圧で一気に肺が潰れそうになる。意識が一気に刈り取られそうになる。

手足の感覚がなくなり、フラッグの笑い声だけが頭に響いた。



「キミはその刀のせいで最強を騙るけど、それは真っ赤な嘘さ。そうとも、キミは弱い！ 『ガレオンを召還できないキミ』は、ガレオンマスターですらない！ 所詮、回数制限のある陽炎の技なんか大したことないんだよ！」

フラッグが突きつける勝利の言葉。それは事実、レインがいつも感じていたことだった。

他の者はカードを媒体にガレオンを呼び出すが、レインには何故かそれが出来ない。今まで何度試しても無理だった。レインにはガレオンマスターとしての才能がまるでなかった。

ガレオンの召還なしでも陽炎のおかげで戦うことは出来たが、しかし陽炎は技が使い捨てのため長期戦には向いていない。

術や技を永続的に放てるガレオンの無尽蔵なエネルギーが、いつももうらやましかった。

(せめてあと一回、R級の技が残っていたら……)

水圧に潰されながら、ないものをねだる。

この水圧を覆す神の如き一撃。

そんな力がここにあれば。

「潰れるオ、レイイインッ！」

意識が、持つて行かれる。

走馬燈が過ぎる。

俺はここで死ぬのか？ それいいのか？

本当に？

否、伝えなくてはならない。恩人たるイリーナ王に、あのことを。

おそらくはレーピンが黒幕で、このままではイリーナ王は 謀殺されてしまう。

その前に、どうしても伝えなくてはならない。

意識を失いながらも、水を飲み込みながらも、レインは懸命に、

叫んだ。

「 だから、死ぬ、わけには……っ、いか、ないん、だよ……」

っ！——」

『よかるう、人間。ならば生きるため、貴様に私の力を貸そう』

「!？」

レインが意識を失うと同時。

刹那にして、戦の神の一撃が。

水圧を覆し。

天地を、絶った。

「なあああにいいいいいつ!？」

フラッグの表情が固まる。信じられないことが、目の前で起こっていた。

「う、嘘だ……アスラン最強の赤のガレオン……アテナが！ 何故ここに!？」

SR級・赤のアテナ。紅の法衣を重ねた銀の鎧は端麗にして荘厳。神の槍たる銀の矛が天に煌めき、その肩に壱羽の梟を従える。平和の印・オリーブを模した円形の盾をかざしながら、薄桃色の長い髪をなびかせる。

レインを抱きかかえながら、瞳の深紅が、フラッグを鋭く射貫いていた。

「何故？ 愚問だな。私は我が主たるレインの、赤の魔力に応じて馳せ参じたただけだ」

「バカなっ！ アテナなんて、アスランの将校クラスだって呼び出せないのに……!! それを、こと召還に関しては落ちこぼれのレインが……!!！」

「阿呆め。それは今まで彼が黒のガレオンしか召還しようとしなかったからだ。そも、レイン!! アスタリアという男は、陽炎を守りし由緒正しきアスランの血族だ。それをクセルルクスの者が出生を騙し、育てていたに過ぎない」

故に、とアテナは続けた。

「私は今より、マスター・レインの剣となるう」

「ふざけるなあ！ いけえええ、ヨルムンガルドオオツ！」

顔を憤怒に染めながら、フラッグは命じる。三体のヨルムンガル

ドが再び大洪水を放ち始める。 SR級・アテナの属性は赤。如何に戦神とはいえ、青属性の攻撃である大洪水を受けきることは不可能。

の、はずだった。

「『カラミタイ・ロンド覚醒鼓舞』」

爆発的に力を増す、アテナの闘気。

洪水を上昇してなんなく躲し、一瞬にして手前のヨルムンガルドの背後に回り、

「『ヴァルキユリア戦神一撃』」

銀槍の一撃で、大蛇のウロコに大穴を穿った。

「……………!!」

恐れおののくフラッグ。固唾を飲み込みながら、彼は思い知る。

このアテナは、普通ではない

「て、撤退だ！ お、おい、アテナ！ 平和を重んじるあんたなら、逃げる僕らを攻撃しようだなんて思わないよな!？」

「当然だ。貴様らと一緒にするな」

「へっ、じゃあ、あばよ！ どうせあんたのマスターはすぐにこの熱気にやられて死ぬ！」

捨て台詞を吐いて、フラッグたちは後退、姿を消した。

やれやれ、とアテナは小さく呟きながら、抱きかかえた自らのマスターの顔を伺う。

「……………そういうわけで、私はしばらく貴女には召還されないかもしれない  
テレジア」

眉一つ動かさずそう呟くアテナ。その背後に、ジェットパックでふわりと空中を漂う少女の姿があった。

「んー、了解、アテナっち！ にしてもすごいねえ。アテナっちのさっきのパワー、あたしと組んだときよりもかなりすごいんじゃない？ 彼、一体何者なの？」

アテナよりもやや濃い色の桃のツインテールを揺らしながら、彼女  
テレジア「ローゼンベルガーは興味津々にレインの寝顔を眺

める。

暑さのあまり、ツナギ状の上下が繋がった技師服のチャックは腰まで開かれており、胸元が白地の布で覆われている以外は地肌が露出されていた。

面倒臭がり御用達とでも言うべき格好に身を包んだテレジアの眼は、アテナよりも薄い赤色をしている。

桃髪紅眼。アテナに近い風貌をしているテレジアは、アテナのマスターだった。そう　つい、先ほどまでは。

「失われた大陸、板東の者のようだな。王の力を感じる　あるいは遙か昔、私に縁があつた者の末裔かもしれない。ともかく、悪くない男だ」

「ふーん、悪くない、か。妬けちゃうねー。アテナっち取られちゃうのやっぱシヨック」

テレジアはコロコロと表情を変える。

アテナは『世界に同時に一体しか存在し得ないガレオン』であり、先ほどのヨルムンガルドのように三体同時に現れることがない。

そのようなガレオンの存在は一般的に知られていないが、秘密裏にはこう呼ばれている。

LE級、と。  
トレジェント

であるが故に、テレジアは拗ねていた。仲の良い姉のような存在だったアテナが、今日の前で眠っている男に奪われてしまったのかもしれないのだから。

「それでテレジア、一つ相談なのだが。私の新たなマスターの命を、救ってやっては貰えぬだろうか？」

「うわー、うわー、アテナっち、それモトカノに接する態度じゃないよ。アテナっちの新しい彼女のことなんてあたし知らないもーん」

「何を言っている？　彼は男だから彼女ではない。い、いや、別に彼氏でもないが……」

アテナはあわあわと取り乱す。急にレインを抱える腕がぎこちなくなつた。

「……なんかイラツときたけど、うん、まあ、そうね。助けよつか  
！　そしてあたしの下僕に、間違えた、しもべにしちゃうんだから  
！」

「同じ意味のようだが……まあいい。ともかく、頼んだぞ」  
ため息一つ、アテナはテレジアにレインを受け渡す。

了解でありますっ、と叫ぶと、テレジアは一気に空を駆け抜け  
赤のスカイガレオン、ソステヌートへと向かうのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8934z/>

---

スカイガレオン（カードを使ったハイファンタジー）

2011年12月28日01時57分発行